

月刊 水試ニュース

発行所:愛知県水産試験場(本場) 597号 令和8(2026)年4月

トラフグはえ縄漁の結果と資源管理の取り組み

漁業生産研究所 海洋資源グループ

1 2025年漁期トラフグはえ縄漁の結果

2025年漁期(10~2月)の漁獲量は65トンとなり、好調だった昨年を上回る水揚げとなりました(図1)。近年の好調の背景には、2023年生まれの2歳魚が多かったことに加えて、愛知・三重・静岡の漁業者が連携して長年取り組んできた小型魚再放流などの自主的な資源管理や種苗放流により、資源が増加していると考えられます。

2 資源管理の取り組み

2024年漁期は1日1隻あたりの漁獲量が過去最高でしたが(図1)、水揚金額は伸びませんでした。この要因は、1日の水揚尾数が多すぎると価格が下がることで、1日あたり全体で約2,500尾の水揚げが最適であることがわかりました(図2)。

そこで今漁期は、資源の効率的な利用と市場への安定供給を目的に、1日あたりの水揚尾数を抑えつつ、継続的に出漁することを当グループから漁業者へ提案し、通常は1日2回行う操業を1回に抑える制限を実施しました。

この取り組みにより、2024年漁期と比較して、1日1隻あたりの漁獲量は減少したものの(図1)、累積水揚金額は約2.0倍に増加していました。つまり、1尾あたりの価格が増加し、資源の効率的な利用につながることができたと考えられます。今後も漁業者と連携しながらトラフグを持続的かつ効率的に利用するために資源管理に取り組んでいきます。

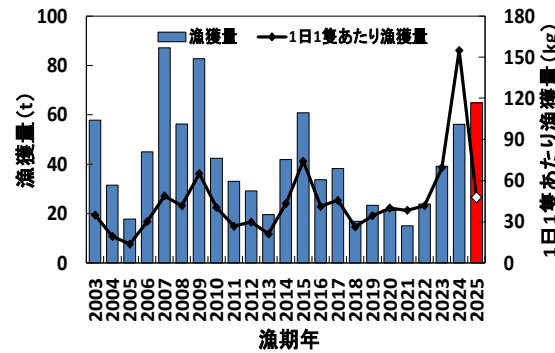


図1 トラフグはえ縄の漁獲量と1日1隻あたり漁獲量の推移

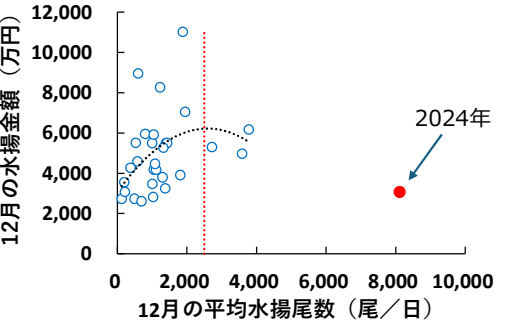
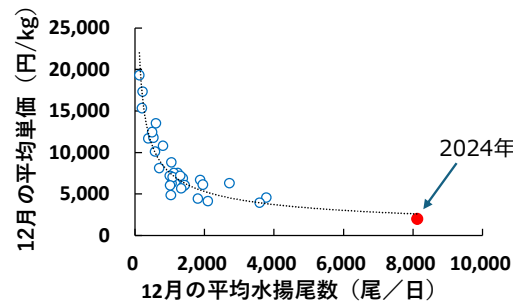


図2 1日あたりの水揚尾数と平均単価及び水揚金額の関係

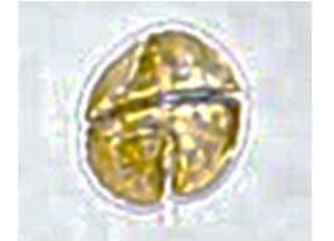
水産試験場研究発表会を開催しました

企画情報部 企画普及グループ

水産試験場では試験研究成果を発表する「水産試験場研究発表会」を毎年開催しています。令和7年度は2026年2月27日(金)に本場(蒲都市)において、漁業関係者、水産関係事業者、県関係者など約70名が集まり、活発な意見交換が行われました。ここでは、当日の発表のうち、海面と内水面から各1題を以下に紹介します。

1 カレニア・ミキモトイ赤潮の発生予察の検討 (漁場保全グループ 河住技師)

カレニア・ミキモトイ(以下、カレニア)(図3)は魚介類のへい死を引き起こす有害プランクトンで、この赤潮による漁獲物等への被害がたびたび発生しています。そこで、三河湾におけるカレニアの発生状況を整理し、発生要因を解析しました。



三河湾ではカレニアは初夏に出現し始めると夏季に赤潮を形成していました。一方で、カレニアの増殖が阻害される条件である、低い表層塩分、高い表層水温、競合する珪藻類の増殖などが初夏にそろると、赤潮には至らないことがわかりました。

今後も漁業被害を軽減するためにモニタリングとデータの解析を継続します。

2 豊川水系における天然遡上アユの有効活用について (冷水魚養殖グループ 小椋主任研究員)

豊川水系では2025年度に7つの漁協が協力して天然遡上アユを下流で採捕し、上流へ運んで放流する「汲み上げ放流」を実施しました。放流したアユの追跡調査の結果、天然アユは成長にばらつきがあり、漁期を通して釣れる一方、漁期初期から中期の釣果を安定させるには人工産アユの放流との併用が必要であることがわかりました。また、天然アユを活用することで放流費用が大幅に抑えられ、漁協の経営改善につながった例も確認できました。



今後は、天然アユと人工産アユを組み合わせた効果的で経済性に優れた放流技術の開発や、漁場の生産力に応じた放流方法を提案していく予定です(図4)。

図4 今後の取組

伊勢湾の研究が水産海洋学会論文賞を受賞しました!

企画情報部 企画普及グループ

漁場環境研究部漁場改善グループの曾根主任研究員による「伊勢湾における生態系構造と生物生産力の変化」が2026年度(第28回)水産海洋学会の論文賞を受賞しました。今後も水産試験場では、水産業を支える研究に取り組んでまいります。

業績の概要は、右の二次元バーコードからご覧いただけます。

